● 読書感想文コンクール　中学校の部 ●

市長賞

岩崎　樹（いわさき　みき）　由木中　１年生

作品名:「夏の庭」を読んで
図　書:夏の庭　-The Friends-

この物語は、主人公が授業中、『オバケ葉っぱ』を眺めながら二年生の時のことを思い出しているシーンから始まる。気がつくと、私はここから物語の中に入りこんでいた。そこまで特徴のあるシーンだとは思えないが、頭の中に、まるで映画でも見ているかのように映像が浮かび上がってきたのだ。私は作者の文章に魅力を感じ、わずか一時間という短い間に二百九ページを読み終えてしまった。

小学六年生のぼくらは、死んだ人を見てみたい、という好奇心から町外れに暮らすひとりの老人を観察し始めた。もうすぐ死にそうな老人が死ぬ瞬間を発見するため、毎日老人の家を見張る日々。だが、不思議と老人は元気になっていき、いつしか少年たちの観察は、老人との深い付き合いへと変わっていった。しかし、「死ぬ」ことに対する好奇心から始まった彼らの付き合いは、その「死ぬ」ということで終わることになる。最初に望んでいた老人の死を発見し、初めて体験する身近な人の「死」に対する、思いもよらぬ悲しみを味わう少年たち。でも、その悲しみ以上に、老人との付き合いの中で貴重なものを得ていた。洗濯ロープの貼り方、包丁の使い方、ペンキの塗り方、庭の作り方、そして、ものの考え方。一人の老人の人生に関わったことにより、ぼくらにとってこの夏は、決して忘れられない夏となった。

この物語のテーマは、やはり、「死」とはどういうことか、だと思う。私は、この本にも書かれていたように、死ぬということは、その人にもう会えなくなってしまう、その人が話している姿をもう二度と見られなくなってしまうことだと思う。だが、決して失われないものもある。それは、その人が残した思い出や、その人の思い、である。この物語の中にある文章、―もしかすると、歳をとるのは楽しいことなのかもしれない。―この後に続く内容は、正にその通りだと思う。人が死んで、あとかたもなく消えてしまっても、その人の思い出は、空気の中を漂い、生き続ける。老人が少年たちに教えたものの考え方も、少年たちの心の中に、ずっと生き続ける。そんなことを考えていると、自分がいつか死んだ時、何もかもが消えてなく

なってしまうわけではないということが、少しうれしく思えた。
　私はこの物語を読んで、「死」とは何かということを考えさせられたし、少年たちといっしょに、老人からいろいろなことを教わった。生活の知恵や、戦争のこと、昔のことなど、知らないことがたくさんあった。私は、「お年寄りとの付き合いや交流」が、どれだけ大切なことか、この物語から改めて学ぶことができた。そして、これからは、そういう「お年寄りとの付き合いや交流」をする機会を大事にして、関わりをふやしていきたいと思った。これまではあまり参加して来なかった地域の活動にも、積極的に参加してみようと思う。